

荒木田麗女・佳包親子の連歌

——豊宮崎文庫月次連歌会資料を中心に——

雲岡梓

要旨

伊勢の文学者、荒木田麗女（一七三二―一八〇六）は、三十代後半から四十代にかけて歴史物語や平安王朝を舞台とする擬古物語を複数執筆し、五十代で養子を引き取ったことを期に育児を中心とした生活に入り、執筆活動から遠ざかった。しかし、豊宮崎文庫と自宅で月次連歌会を主催して連衆に指導するなど、連歌活動は継続していた。そして養子の佳包に対しても幼少の頃より連歌に親しませ、長じて後は連歌会に参加させた。そのように麗女から薫陶を受けた佳包の連歌について、これまで詳しく紹介されたことはなかったため、今回新出の豊宮崎文庫月次連歌会での連歌資料を中心に佳包の連歌活動を概観する。

野村氏義の次男として生まれた佳包は、天明二年に五歳で麗女夫婦の養子となり、慶徳佳包と称した。寛政四年に養父慶徳家雅の死によって十五歳で神宮師職に就いた。幼少期から連歌に親しんだ佳包は、寛政十二年十一月に初めて月次連歌会に参加して経験を積んで行った。個人句集やその他の文学作品を残すことがなかった佳包は、文人としては麗女の後継者となり得なかったが、麗女の随筆には親子で句作を楽しむ様や、病床の麗女を詩歌で慰める佳包の様子が記されている。

一 はじめに

荒木田麗女（一七三二―一八〇六）は擬古物語・歴史物語作者として知られ、特に四鏡の形式を踏襲した歴史物語『池の藻屑』、『月のゆくへ』によって有名である。麗女の執筆活動は三十代後半から四十代にあたる明和七年（一七七〇）から安永七年までの九年間に集中し、安永七年成立の『怪世談』以降は断絶している。しかし、十六歳で西山宗因の曾孫西山昌林に入門して以降詠み続けていた連歌は生涯継続している。その経緯については、麗女の自伝『慶徳麗女遺稿』^①の中で説明されている。

今は五十にもあまりければ、子など養ひて、其の育みに、何事をも捨かぬるやうなれど、連歌は良人もこのまれ、社中もあれば、すてがたき老のたのしみとなせり。（略）

其の後、良人病して、いくほどなく失せたまへば、今はこの道、おもひたえぬべきを、遺言もだしがたく、立繼て御文庫の会、家なる月次の会もつとめて子なる佳包にも学ばせたり。

伊勢神宮神官荒木田氏の一族である麗女は、継嗣のなかった叔父、外宮御師の慶徳武遇の養女となり、家雅を婿養子に迎えた。しかし子がなかったため、天明二年（一七八二）に佳包（五歳）を養子に迎え、麗女はその養育のために執筆活動から遠ざかった。ただし連歌については、当時麗女夫婦が御文庫および自宅にて月次連歌会を主催しており、夫も連歌を趣味としていたため、老後の楽しみとして継続したようである。夫の死後も遺言によって連歌会は続けられ、やがて佳包も連歌を学ぶようになったと記されている。

なお、御文庫とは伊勢神宮外宮祠官の修学の間であった豊宮崎文庫のことで、現存する神宮文庫の前身である。麗

女は安永七年頃に途絶えていた豊宮崎文庫の月次連歌会を再興し、伊勢神宮神官を中心とする連衆に連歌を指導していた^②。

こうした麗女の生涯における連歌活動の全貌やその連歌の特色は、拙著『荒木田麗女の研究』^③で明らかにしたが、麗女が愛育し、指導した養子佳包の連歌については知られていない。そこで本稿では、麗女の連歌資料、随筆等から佳包の連歌に関する記述を抜粋し、佳包の連歌活動を概観する。

二 幼少期の佳包

佳包は安永七年（一七七八）に野村氏義の次男として生まれ、五歳の天明二年六月二十六日に慶徳家雅・麗女夫婦^④に引き取られて養子となった。字は宇卿。号は三寿軒。隼人・左京と称した^⑤。神宮文庫所蔵『山田師職銘帳』によると、養父慶徳家雅の死により寛政四年（一七九二）に十五歳で御師職に就いた。文化三年（一八〇六）に麗女が没した折には、麗女の遺著を豊宮崎文庫に奉納している^⑥。天保十四年（一八四三）没。

安永八年から享和元年までの麗女の発句を収める『麗女句藁』^⑦には、佳包を引き取った天明二年以降、麗女が折々に詠んだ佳包に関連する句が複数収められている。

いぬる月、子をやしなひければ同じ手向を

かけ初る願の糸や千代の竹

夏の頃やしなひけるおさなきものを、重陽の日ことさらにむかへし侍るとて

植て千代松にならばん宿の菊

試筆 おさなき者のことし六に成きとてよろこびければ

かぞへしるむつきや千代の初日影

八日、子日なりければ、れいの稚き者をそへて

引植てこだかき陰や松の春

天明二年の七夕には「千代の竹」、同年重陽の節句には「千代松」、天明三年試筆には「千代の初日影」、同年子の日には「こだかき陰」を詠み込み、麗女が佳包の健やかな成長と長寿を願っていることがわかる。また、麗女は天明三年正月に佳包を伴って伊勢神宮外宮・内宮に参拝している。

同十日、子なる者に内外の神拝ませ侍るとて、豊の宮にて

末遠くならせ宮路の春の風

内の宮は裳濯川を御手洗なりける、川辺にのぞむほど、おさなきものにいひかけ侍る

心すむ声聞そめよ水の春

「末遠くならせ」、「聞そめよ」といった表現からは、末永く参道の春風や御裳濯川の流れる音に親しんで欲しいという期待が読み取れ、佳包を御師職を継ぐ後継者として育んでいることがわかる。また「いひかけ侍る」とあることから、幼い佳包に発句を聞かせて連歌に親しませていたのであろう。この他にも『麗女句藁』には佳包に「いひかけ」た旨の詞書を持つ句が見られる。伊勢神宮では年中行事として内宮の伊勢海連歌・岩井田初連歌・月見連歌、外宮の外宮初連歌・浜出連歌が興行されていたことから、連歌は神職として身につけておくべき教養でもあった⁸⁾。麗女が連歌を「いひかけ」ていたことは、神職を継ぐ佳包への教育の一環でもあっただろう。

そのように幼少期から連歌に親しんだ佳包は、『麗女句藁』によると寛政十二年十一月に、初めて月次連歌会に参加

している。

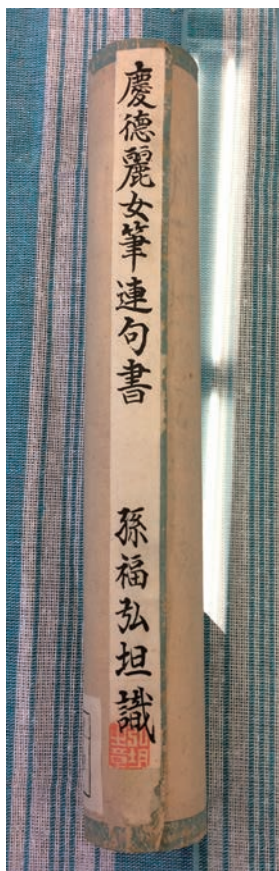
霜月十二日、佳包はじめて月次の会にまじりて、付句など思ひの外にかひぐしかりけるを、いと思ふやうにうれしく見て、又の日いいかけける

初草の色めづらしき冬野哉

麗女は佳包が手際よく付句をしたことを喜んでいる。この時、麗女六十九歳、佳包二十三歳。この月次連歌会が豊宮崎文庫の月次連歌会か自宅での月次連歌会かは不明である。

三 連歌会においての佳包

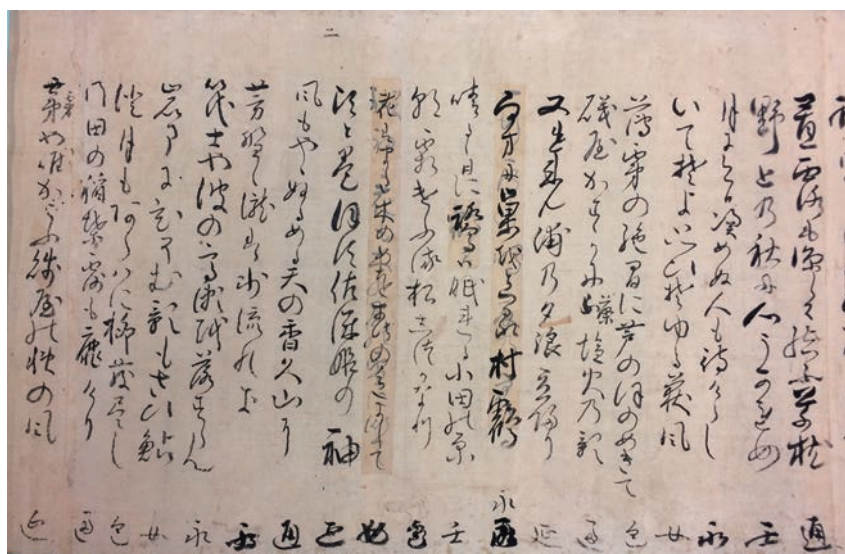
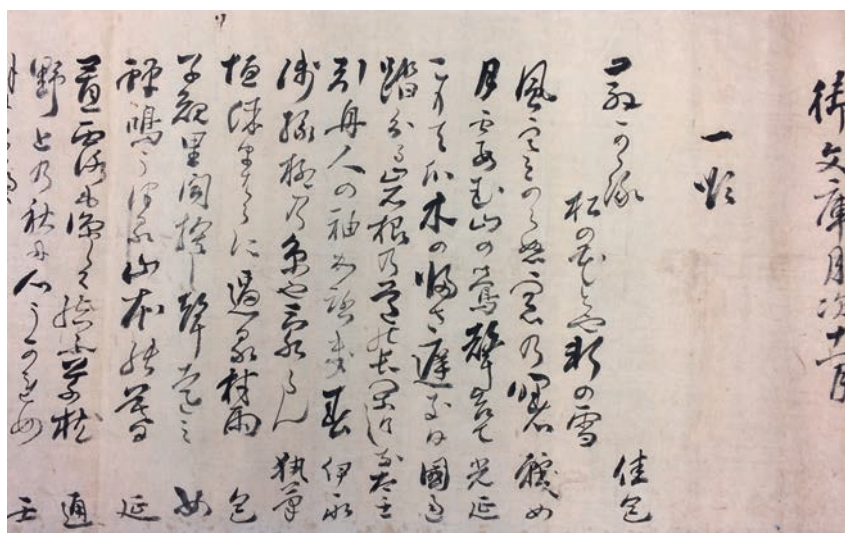
佳包は自身の句集を残していないが、佳包が連衆として参加した豊宮崎文庫月次連歌会での連歌を記した『御文庫月次連句』という資料が神宮徴古館に存在する【写真一】。以下に簡単な書誌を示す。



【写真一】

外題「慶徳麗女筆連句書」（孫福弘坦による後補）。端作「御文庫月次十一月」。神宮徴古館整理名…「御文庫月次連句」。整理番号「書跡／488」。卷子装一軸。縦二八・三×横八三・三（cm）。孫福弘坦識。孫福弘坦は伊勢の人。皇学館大学の前身、神宮皇学館の幹事を務めた。収載句数二十九句。一部に貼紙による訂正が施されるが、貼紙下から初案が透けて見える。連衆は、佳包（発句）・麗女（脇）・光延（第三）・国通・太壬・伊永・執筆（不明）。

連衆の「光延」は小林光延。寛延二年生。天保二年没。橘氏。千里・秋水・梅屋・梅軒・亀息・于世などと号した。麗女に連歌を学んだのち里村南家第九代の里村昌逸にも入門。文化八年、伊勢の俳諧結社神風館主第一四世を継承した人物である⁹⁾。国通・太壬・伊永については不明。以下に写真と翻刻を掲げる。



荒木田麗女・佳包親子の連歌（雲岡）

御文庫月次十一月

一順

- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|---------------|-------------|---------------|------------|------------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|---------------|-------------|-----------|----------|--------------|--|
| 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9
ウ | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 磯屋かすかに藻塩火の影 | 薄霧の絶間に芦のほのめきて | いでそよ思ひそゆる萩風 | 月に今日冷めぬ人も待けらし | 野上の秋に心うかれめ | 置露も涼しく結ぶ草枕 | 蝉鳴うつる山本の暮 | 子規里間捨し声遠み | 垣ほまだらに過る村雨 | 浅緑柳の糸や乱らん | 引舟人の袖かろき春 | 踏分る岩根の道の長閑けしな | こりて爪木の帰さ遅き日 | 月霞む山の鶯声告て | 風寒からぬ窓の曙 | 散かゝる松の花とや軒の雪 | |
| 通 | 包 | 女 | 永 | 壬 | 通 | 延 | 女 | 包 | 執筆 | 伊永 | 太壬 | 国通 | 光延 | 麗女 | 佳包 | |

17	又も来ん浦の夕浪立帰り	延	
18	何方に巢をとへる村鶴	永	※句と作者を貼紙で訂正。初案「一行雁の鳴夏の空 通」。
19	晴るゝ日に鶯は眠れる小田の原	壬	※第二句を貼紙で訂正。初案「鶴は」。
20	朝霜けぶる松しづかなり	包	
21	花はまだ木のめを春の色にして	女	※句を貼紙で訂正。初案「咲初る花も木の間の雪に似て」。
22	頃と巻ほす佐保姫の袖	延	
23	二 風もやゝぬるめる天の香久山に	通	
24	芳野ゝ滝は氷流れき	壬	
25	筏士や波の高瀬を落すらん	永	
26	岩まにひそむ影もさび鮎	女	
27	澄月もあらはに柳落尽し	包	
28	門田の稲葉露も靡けり	通	
29	霧や誰かこふ賤屋の秋の風	延	

この「御文庫月次十一月」の会は十一月に豊宮崎文庫で興行されたものであるが、『麗女句稟』に記される、佳包が初めて参加した寛政十二年霜月十二日の月次連歌会とは別の会であろう。『麗女句稟』詞書には佳包が付句を「かひゝし」くこなしたことが記されるのみで、発句を詠んだことに言及されていないからである。

発句は「散かゝる松の花とや軒の雪」。散って落ちかかってくる松の花だといのか、軒に降る雪は。軒に降りかか

る雪を松の花かと思まがう、という趣向である。季は冬（雪）。

脇は「風寒からぬ窓の曙」。風が寒くない曙の窓。前句を受けて、夜明けの薄暗い中だから雪と花とを見間違えたのだ、と付けた。また、雪が降っているが窓の中にいるから風が寒くない、とする。雑の句。

第三は「月霞む山の鶯声告て」。月が霞む山の鶯は鳴き声をあげて春を告げて。前句の「風寒からぬ」を受けて、春の山の景に転じた。季は春（鶯）。

息子を客として発句を詠ませ、会の主催者である母が脇を付け、弟子が第三を添えるという、内輪の会であったことがうかがえる。

また、この資料では18句目・19句目・21句目に貼紙による訂正が見られる。18句目の初案「一行雁の鳴夏の空」は、季が夏（夏の空）であり、発句から冬・春・夏・秋と展開してきた季が再び夏に戻ることを嫌って「何方に巣をとへる村鶴」と訂正して冬句に転じたか。それに伴い、19句目と「鶴」が重複してしまうため、19句目の初案「鶴は」を「鶯は」に訂正したと見られる。

21句目の初案「咲初る花も木の間の雪に似て」は、佳包の前句「朝霜けぶる松しづかなり」に麗女が付けたものである。朝霜が解けて立ち上った煙で霞むように見える松を詠む前句に対し、咲き始めた花を木の間の雪と見まがう、という付句は、発句「散かゝる松の花とや軒の雪」の趣向と類似している。これを嫌って「花はまだ木のを春の色にして」と訂正したのであろう。

四 麗女の晩年における佳包

麗女の随筆集『麗女文集 下』^⑩に収められる文化元年（一八〇四）に記された短編「萩を植る辞」には、佳包が山から移植した萩の花をめぐる母子の発句が記されている。

萩の盛なる比、其花を庭にうつさんとて、佳包が山の方に堀求むべくて行たりける。やがていとあまたもたせて帰りたるを、見けうじけるほど、たはぶれのやうにて佳包、

幾や今日子日には似ぬ萩遊

といへるを聞て、

宮城野ゝ跡認得たり萩あそび

すなはち庭に植させて見出して、長月なりければ、又佳包、

行秋のへだてともなれ真萩垣

母子で萩の花を愛でる中で、佳包が「幾や今日子日には似ぬ萩遊」と詠み、それを受けて麗女も「宮城野ゝ跡認得たり萩あそび」と詠んでいる。麗女の薫陶を受け、佳包もまた句作を好む風流人に成長していたことがうかがえる。この時、麗女七十三歳、佳包二十七歳である。

同じく『麗女文集 下』には、麗女が没する七ヶ月前にあたる文化二年六月に書かれた無題短編が収められている。去年の冬より心地煩らひて、佳包始め親族ども心苦しげに見あつかひて、葉などまめやかに勧めけるによりて、打へ悩むこともなく、さりとておこたるとしもあらず。（略）されど今も猶音信る人も絶やらねど、かゝる悩み

のうちは手の震ひて物書あへず、よろづむつかしうすさがちなるを、佳包は思ひしりて徒然をも慰むべく、時々
は花紅葉につけて大和の歌の本末とりかはし、又唐歌作りあきなどしけるになん、いとあらまほしう、おのづか
らものおもひもなく、心のまゝに病をもつくろひて、起ふしも心やすし。

ここには病床に伏し、手が震えて執筆活動ができなくなった麗女を、佳包が短連歌や漢詩で慰める様子が記されて
いる。

五 おわりに

佳包を養子として以降、麗女は母として健やかな成長を祈る句を詠み、連歌の指導も行っていた。佳包もそれに応
えて月次連歌会に参加し、発句を詠むなど経験を積んで行った。『麗女文集 下』には折々に句を詠む佳包の姿が記さ
れていることから、佳包もまた句作を好む風流人に育っていたことがわかる。個人句集やその他の文学作品を残すこ
とがなかった佳包は、文人としては麗女の後継者となり得なかったが、麗女の薫陶を受けて連歌をはじめ和漢の詩歌
を身につけ、病床の麗女を詩歌によって慰める孝子に成長していた。

〔注〕

（１）『慶徳麗女遺稿』は享和二年（一八〇二）頃成立。大川茂雄・南茂樹編『国学者伝記集成（上）復刻版』（一九九
七年、東出版）に拠った。以下『慶徳麗女遺稿』の引用は全てこれに拠る。

（２）安永八年までの麗女の発句を年代順に収める『麗女句集』（東京都立中央図書館加賀文庫蔵、請求記号：9113-A-13）

の安永七年条に「春の頃より筑波の道再おこり侍りける卯月廿七日」とあり、これ以降「御文庫月次」の発句が句集に収められる。『慶徳麗女遺稿』にも「今はこの地に連歌する人なくて、宮崎文庫の会も絶ぬるをなげかしうおもふ人々もあれば、いかにもして、ふたゝびおこさんの願にて、人々をもみちびくやうなり」と記される。これらから、この頃に麗女が豊宮崎文庫月次連歌会を再興させ、指導的役割を果たしたことがわかる。

(3) 雲岡梓『荒木田麗女の研究』第一部「麗女の連歌」(二〇一七年、和泉書院)。

(4) 麗女は著書に「荒木田氏女」「荒木田氏」「荒木田武遇女」と署名するが、家名は「慶徳」である。

(5) 佳包の経歴については、川端義夫『校訂伊勢度会人物誌 付録索引並墓地図』(一九七五年、古川書店)に拠る。

(6) 下村要蔵『早修区人物史』「釜屋麗女」項(一九一二年、上林房次郎発行)に拠る。

(7) 『麗女句稟』(神宮文庫蔵、請求記号：三門一五七三八)は安永八年から享和元年までの麗女の発句を年代順に収める自筆発句集。

(8) 奥野純一『伊勢神宮神官連歌の研究』第六章 神宮神官連歌の固定と終焉(一九七五年、日本学術振興会)に拠る。

(9) 前掲注(5)に拠る。

(10) 『麗女文集 下』(白百合女子大学図書館所蔵、請求記号：090/A64/21)は安永八年から文化三年までの文章を年代順に収める随筆集。上巻は所在不明で下巻のみが残る。

〔付記〕本稿の執筆にあたり、『御文庫月次連句』の翻刻を許可して下さった神宮徴古館に厚く御礼申し上げます。

なお、本研究はJSPS科研費助成事業(21K12933)による成果の一部である。